

# 地域・家・生活

文・竹内美樹

## 第1回 気付いたら空き家ばかりに

### 地域をまわってみた

近所が空き家だらけになっていると気付いたのは最近だ。「あの家は増築したんだけど、ばあさんが亡くなってね。息子さんが時折帰ってくるだけだよ」「そっちの家はご主人が名古屋に転勤になっちゃった。平日は誰もいないんだ」。地域の顔役が教えてくれた。

きっかけは向かいの家に空き巣が入ったことだった。奥さんが急に亡くなり、空き家になったばかり。ご主人は高齢者施設にいる。出棺のとき、会ったことのない2人の娘さんが、遠くにいる（1人は海外）からなかなか来られないといていた。

空き巣があったときは、へえ〜っと思っただけだった。が、よく考えると、そんな家がすかさずねられるのは怖い。すると、やっぱり気の利く御仁がいるものだ。「パトロールをやるので集合せよ！」と、回覧板がまわってきた。

指定の場所に時間どおりに出向くと、集まっていたのは8人。ピカピカ光る警棒を持たされ、近所をぐるっと見まわった。みな同じ地区に住んではいるが、顔見知りともいえない間柄だ。正直に言えば、誰だかわからない。共通の話題もない。沈黙が苦しくなってきたとき、先の顔役が個々の家の実情を語り始めたのだった。



急速に空き家が増加する地域

## 地域の過去と現在

私の住んでいる地域は長野市の外れ。千曲川（信濃川）の脇に貼り付いた南北に長い集落で、川が市境である。郊外だがニュータウンではない。歴史は意外と古く、村の痕跡が室町時代からある。昔は、ややこしい名前だが、里村山村といったようだ。

川の恵みと脅威とともに歩んできた集落。江戸時代に起きた戊の満水で多数の死者を出すなど、度重なる河川の氾濫に悩まされた。洪水による地形変化が対岸との境界争いに発展し、村の長が幕府の裁定を仰ぐため江戸に赴いた旨の記録も残っている。

現在は約 150 世帯がそこで暮らす。一代前は多くが兼業農家。何代にもわたる農家も珍しくない。家並みは結構立派で、古い蔵もある。水（用水）にまつわる取り決めも多く、持ちまわりで管理者を決める。祭りをはじめ昔からの慣習も耐えていない。それはともすれば、よそから来た者に閉鎖的な印象を与えなくもないのだが。

私は 1960 年代の終わり、生まれてしばらく後にこの地へ越してきた。父母にとって初めての新築住宅。木造モルタル外壁・トタン屋根のその家に、私は高校生まで暮らした。生家とっていいだろう。成長の記憶はこの家とともにある、はずなのだが、この家も典型的な空き家である。私は生家を放置したまま隣に住んでいる。



集落の歴史が書かれた碑

## 地域の40年を振り返る

長野県の空き家率は、別荘を除くと約15%。6～7件に1件は空き家だ。「増え続ける空き家を活用しよう」というのは全国的な呼びかけだが、私の暮らす地区もまた、その最前線に立っている。

急激な周囲の変化に戸惑ってもみるが、実際、気付いていなかっただけに過ぎない。仕事柄、住まいに関わるニュースに触れない日はなく、空き家問題も何度も報じてきた。が、結局のところ見ようとしなない目には何も見えていないのだ。だからこのコラムを借りて、ここ最近の地域とそのなかでの暮らしの変化を振り返ってみようと思う。

いまから40年ほど前、私が住む地域はどんなだったろうか。何が変わり、何が失われ、何が生まれたのか。少しその気になって、考えてみたいのである。

この地に人が住みついたのがいつなのかわからないが、記録が残っている時代だけで約500年。私が物心ついてから40年ちょっとの変化などわずかな時間だけれど、それでも何かの発見があるかもしれない。

(つづく)